

< 評論 >

Recreology と Recreationist の思考

鈴木秀雄¹

Consideration of Recreology and Recreationist

Hideo Suzuki, Ph.D.¹

レクリエーションが紡ぎ出すもの

本学会と筆者との関係は、学会第2回大会の発表からである。既に半世紀に及ぶ関係である。この間、米国フロリダ州立大学大学院での4年間の学びが存在する。留学手続きの連絡を取っているときには、大学院の専攻名は単にレクリエーションであったが、実際に入学する段になると、専攻名称が Leisure Services and Studies に変更になっていた。当時、全米レクリエーション教育者会議の座長であった Dr. Frances C. Canon からレクリエーションそのものを学ぼうと、フロリダ州立大学大学院に進むことを決めていたが、その名称変更がどのような意味であるのかを入学当初は知る由もなかった。

現在の自身のレジャー・レクリエーション観(論)は、米国留学の学びを基礎としながらも、その後の日本での学会活動を通して培われたことに疑いはない。

この名称変更については本学会においても同様で、1991年の函館において開催された学会大会での議論の深まりから、英語名では既に用語として、Japanese Society of Leisure and Recreation Studies と Leisure が組み込まれていることから日本レクリエーション学会となっている名称を、日本レジャー・レクリエーション学会と改称し、外国人のメンバーも会員に含まれるとすれば、英文名も正確を期すべきとの観点から、Japan Society of Leisure and Recreation Studies と現在の表記へと変遷してきた。

レクリエーションの定義としては、「単なる遊

びから創造的な活動までを含む一連の広がり (Spectrum) にあって、条件として：

- ① 確実に余暇に、また、余暇化された中でなされ、
- ② 拘束されることなく自由に選択され、
- ③ それ自体を、楽しむこと・面白さを味わうことが主たる目的

とした諸活動・状態の総体」であると理解されている。

本質的には「レクリエーションは、日々に寄り添う掛け替えのない、“とっておき”の楽しさおもしろさを求めて、豊かな“活動”、“生活”、“生き方”を紡ぎ出す」ものに他ならず、またそれらを紡ぎ出す力を有しているレクリエーションであることも確かであり、そのレクリエーションの知られざる力が認識されていないことも事実である。万人が実質的な日常生活の中では、レクリエーションを求めているにもかかわらず、その認識、状況、行為、活動をレクリエーションと表現(意識)していなくても、また、レクリエーションと理解していなくても、レクリエーション学(Recreology)から捉えれば、実質的にはレクリエーション(活動)を日々求め実施し、したいという人としての欲求を有していることを意味している。実態はそうであっても、あえて日々に寄り添う掛け替えのない、“とっておき”の楽しさおもしろさを求めて、豊かな“活動”、“生活”、“生き方”の紡ぎ出しをレクリエーションとして表現、理解、意識、していないだけのことである。であるからこそ本質的なレクリエーションが何である

1 関東学院大学教授 Professor, Kanto-gakuin University
日本レジャー・レクリエーション学会会長 President, Japan Society of Leisure and Recreation Studies

かを社会に向けて解き明かし、レクリエーション再考を促す機会を学会から積極的に提示しなければならぬといえる。

Recreology と Recreationist の思考

如上のためにも、学会としての **Recreology** (レクリエーション学) を掲げ、それぞれの自身の専門分野において、レクリエーションとは何かを問われれば、明快に解説する姿勢をもって解き明かし、且つ、それでは、“あなたのレクリエーションは”、と問われれば、実生活の中では自然化 (**Naturalization**) されレクリエーションの実践を自らの生活の中に組み込んでいる **Recreationist** であることを伝えることができれば、この上ない真のレクリエーションの普及を推進する力を有する人材であることは言うまでもない。

ナチュラリスト [**Naturalist**] とは、自然に関心をもって、積極的に自然に親しむ人。また、自然の動植物を観察・研究する人。自然主義者を意味する。翻って、レクリエーションニスト [**Recreationist**] とは、レクリエーションに関心をもって、積極的にレクリエーション活動に親しむ者、また、真のレクリエーションそのものの実践や研究 (= **Recreology**) をする者と理解してよい。レクリエーションをしっかりと理解し、豊かな生活の紡ぎ出しにレクリエーションを利用し・活用している者という意味合いである。

レクリエーションの身体的領域として、本質的なスポーツが内在するが、スポーツの意味は、身体領域を表現しているのであって、その傘の中(傘下)の種目を明示し、スポーツそのものは身体的領域であり、単なる種目の意味ではない。スポーツを傘と理解すればその傘下にさまざまな種目活動が展開されている。レクリエーションも然りで、レクリエーションそれ自体は決して種目ではない。明らかにレクリエーションの傘下に様々な活動が内在しているのである。例えば、“パチンコや競馬”が、レクリエーションか否か、ではなく、そのパチンコや競馬をその個人が、レクリエーションとして条件を満たした枠組みの中で行っているか否かであり、種目的な判断から、レクリエーションであるとか、ないとか、を判断することではない。そこにレクリエーションたり得る条

件が深く関係してくることになる。

本稿は、「現在のレジャー・レクリエーションそのものが、多くの場面で正しい意味で捉えられておらず、既成事実として現代社会の中で理解され使用されている現状のレジャー・レクリエーションに正邪の判断をしないことの善し悪しを説くことはともかく、いささかの疑問も持たないままにその存在を正しいものと受忍することもなく認識していることに強い危機感を持ち、本来のレジャー・レクリエーションの在り方に対する議論を〔学会においても〕活発にしていくべきであるという願いを持ったからに他ならない。」¹⁾

レクリエーションの本質的議論の中で、曖昧な概念や定義のもとで、レクリエーションを論ずることを避け、それぞれがレクリエーション論を有するとすれば、その論を広く議論する場としての機会を学会としても用意しなければならないといえる。

学会の共通言語である“レジャー・レクリエーション”の議論を通して、豊かなレクリエーション運動 (Movement) の展開と、現代社会に資するレクリエーション活動 (Activity) の活用を促していく必要があろう。

益々先の見えぬ時代の中にあつて、先を見通す (Perspective) 姿勢、トゲトゲしい時代の中にあつて、心豊かな、心根のやさしい本来の日本文化への回帰と共に現行規範からの転換 (**Paradigm shift**) を視野に、学会人として一所懸命な努力の中から、見えないものにも気づき、思わぬ素晴らしい偶然に出会ったり、予想外のことを発見し、また、たゆまぬ探求から、新たな価値あるものを見つけだすことのできる **Serendipity** も可能となる。ふとした偶然をきっかけに、あなた個人に最もふさわしい幸運をつかみ取ることができるレクリエーションの発見により、“知られざるレクリエーションの力”の認識も生まれてくるに違いないであろう。

戦後、長い時を経て、日本の隅々にまで知れわたってきている「レクリエーション」という言葉は、その正しい概念が、時代の中で取り残されてきてしまい、身につけている感覚 (理解) は、まさに動物の刷り込みのように変わることなくその人の中に生き続けている。旧態依然たる概念の払

拭には、何か大きなきっかけや、**Momentum** (勢い、推進力)が必要となる。刷り込み(**Imprinting**)とは、言うまでもなく、動物の生活史のある時期に、特定の物事がごく短時間で覚え込まれ、それが長時間持続する学習現象の一種である。

どこかで、レクリエーションという言葉と内容を漠然と提供され、その理解を感覚的に持ち続けているのだとすれば、レクリエーションの刷り込みの訂正をどこかで正しく認識し理解する機会の提供をしていかなければならない。

レクリエーション観の新生 (**Apoptosis**) に向けて

既に、刷り込まれている何十年も前の旧態依然としたレクリエーション観や概念から、未だに狭い領域に閉じ込められてしまっている今のレクリエーションを解き放し、正しい情報と理解による、レクリエーションの本当の理解のために、IT流に言えば、刷り込まれた記憶の書き換えでもある、既存のメモリー (記憶媒体) の「上書き保存」から始め、生物が有する細胞の自然死、即ち、個体をより良い状態に保つために積極的に引き起こされる管理・調節された細胞のプログラム化された細胞死 (**Apoptosis**) のように、古い殻からの脱皮や、変化ではなく、ヒトとしての進化として、その先にあるレクリエーションの新生 (**Apoptosis**) に繋げていかなければならない。

日々に寄り添う掛け替えのない、“とっておき”の楽しさおもしろさを求めて、豊かな“活動”、“生活”、“生き方”を紡ぎ出すことこそ、レクリエーションそのものであるという理解の刷り込みができるよう、社会の仕組みを変えていく試みを進める必要があるといえる。

今、社会が抱える多岐にわたる課題に対して、レクリエーションの価値論を積極的に明らかにし、その課題解決のためにもレクリエーションを役立てていかなければならない時代である。

戦後の荒廃した激動期に、社会経済の成長と同様の動きの中で、組合活動の一環としても組み込まれ目覚ましい発展・普及を遂げてきたレクリエーションであるが、過激な労働の対蹠要素としての存在でもあったレクリエーションも現代社会ではレクリエーションの捉え方も変わり、すさま

じいレクリエーションの発展期では、レクリエーションを吸い取り紙に乗せたように、あるいは乾いた土の上に流された水のように素直に吸収されていったが、レクリエーション環境を取り巻く諸条件の異なりの中で、白山源三郎のような **Movement** の展開を、また、三隅達郎のような **Activity** の普及にかけた強いリーダーシップが、逆に、今こそ必要な時代ではないかと痛感する。

個人の強いリーダーシップの発揮ができない難しい時代だとすれば、関係する多くの者が力を合わせて、新たなレクリエーションムーブメントを創造していかなければならない。

日本レジャー・レクリエーション学会 (**JSLRS**)こそが、その担い手としての役割を果たす時代が来ているのではないだろうか。

学会の基本は、個人の専門性や興味・関心からくる研究の自由度が最優先されるが、労働環境の厳しい中では、レクリエーション学 (**Recreology**) の確立よりも、レクリエーション運動 (**Movement**) が重要であると白山源三郎²⁾ が1949年に説いているが、時代が変わり非正規雇用などを含めた新たな労働環境の変容もさることながら、ライフスタイル (生活様式) の変容も相まって、白山源三郎が時期尚早と唱えた、レクリエーション学 (**Recreology**) を、今こそ、思考すべき時代であろう。

本学会に関連プロジェクトなどを立ち上げ、学会と社会とを繋ぐ研究を活性化し、多元的な視野でレジャー・レクリエーションを捉えていく試みも一考すべき事柄である。活発な議論を期待したい。

引用文献

- 1) 鈴木秀雄他「余暇における諸活動と法的課題」『ジュリスコンサルタス』第9号、関東学院大学法学研究所、2000年3月、pp.49-135.
- 2) 鈴木秀雄他「白山源三郎・三隅達郎に見る日本における初期のレクリエーション観～関東学院大学でのインタビュー (1980年1月13日)を中心に～」日本レジャー・レクリエーション学会第24回大会 (於：拓殖大学北海道短期大学、1994年9月10日～11日) 研究発表資料、pp.1-8.

